

私のお薦め：『インドへの道』

市野悠

2006年10月28日

1 はじめに

フォスターを紹介するのはいいとして、なぜこの作品を選んだのかを説明しておかねばなるまい。フォスターの紹介が目的なら他の作品でもよかった。それだけなら『眺めのいい部屋』とか『ハワーズ・エンド』といった作品で彼の天国的な筆遣いだけに焦点を当てればよく、私自身これらの作品も大好きだ。しかし「どうせ書くなら『インドへの道』を精読しよう」という欲張りが頭をもたげてしまった。

『インドへの道』以後、フォスターは小説を書かずに評論の道を選んだ。フォスターの姿勢^{*1}はどの作品にも色濃く反映されているが、本書はそんななかでも特に幅広い主張を展開している。1913年から始めた執筆作業は、実に丸10年かかって1924年ようやく日の目を見ることになる。まさに彼の集大成となった小説だと言ってよいだろう^{*2}。

^{*1}「思想」という言葉を使いたいところだが、[3]に倣うことにする。小野寺さんはこの本で「姿勢」以外にも重要な提案をいくつかつけていて、フォスターを表現するところの「優雅な怠惰」や「晴朗な精神」という言葉遣いには、ただ感嘆するしかない。ちなみに日本語の「姿勢」はしっくりくるのだが、英語の attitude とか posture というのはどうもぎすぎすしている。

この国での文明は帝国のさまざまな廃墟をあちこちさまよう亡霊のようなもので、それは偉大な芸術作品とか崇高な行為となっては現れず、育ちのいいインド人が座ったり寝ころんだりしているときのさまざまな姿勢に現れるのだった（p345）

という箇所が小野寺さんの表現の元になったのかどうかは知らないが、この最も重要な箇所は注意深く読んでほしい。さらに続けて

それは、回転をつづけていた行動が停止したときにはっきり見えて、すると、ヨーロッパには攪乱はできても獲得はできない文明が姿を現したのである（p345）

とも言う。東洋人であるところの日本人が、「回転」が止まった今こそフォスターを読み、その「姿勢」を感じとってほしいと私が願う理由なのである。

^{*2}正確には『インドへの道』と同時並行で書かれた『モーリス』という同性愛をテーマにした作品がフォスターの死後出版されているが、これは彼の作品としては異質なものだと言ってよいだろう。いずれにせよフォスターはこの『インドへの道』を境に、「姿勢」を小説という形式に流し込むという困難な作業に懲りて、小説を書くのをやめてしまった、というのが定説である。

フォスターは自分の体で感じたインドと、ストーリーに配置した登場人物のすべてをフル活用し、小説という形式で生々しい論弁を実現した。このような「芸術のための芸術」を脱した作品を選んでしまったからには、単なる review というわけにはいかない。フォスターの筆致の巧みについては全く触れず^{*3}、作品全体を貫くいくつかのテーマに分け、その内容について考えていく。ただしこの作品を超えた歴史のあるいは文学的な視点から「俯瞰する」ほどの技量は持ち合わせていないので、あくまで「『インドへの道』を読む」という立場をとらせていただく。

お察しの通り、文学とは縁遠い学問をしている私にとって、『インドへの道』を洗い直すという作業には膨大な時間と労力を要した。しかもその成果は未だ私家の域を出ない。あくまで理学部生の戯言という色眼鏡で読んでいただくのが妥当かと思う。

なお、フォスターを知るきっかけになったのは高校時代の恩師、小川幸司^{*4}による図書館ゼミである。当時どれほどのことを私が理解できたかは計りかねるが、深い思索に基づいた解説とともに現代最高の作家に出会えたことを幸せに思っている。また、この記事を書くにあたって、彼の書いた論文 [4] および前述の図書館ゼミにおける配布資料を、小川先生本人から快く送付していただいた。これらはすべて今回の参考資料となっている^{*5}。重ねて感謝の意を表したい。

蛇足だが、当時私は世界史にそれほど興味がもてず、にいた^{*6}。今となってはそれを後悔しているし、望むなら相当ハイレベルな勉強ができたであろうとも思う。世界史を必修科目にすべきかどうかはさておき^{*7}、勉

^{*3}ちょっとだけ言わせてもらおうと、これから取り上げていく人物描写はさておき、風景描写に至っては、もう神懸りの絶品なのである。三部構成の各部冒頭で、それぞれチャンドラポアの街と空、マラバー洞窟、クリシュナ祭を歌い上げる章なんかは一度は読んでほしいと思う。

^{*4}当時、松本深志高校地歴科で世界史を教えておられた。

^{*5}これらは入手の難しいものだと思うので、私に言ってもらえれば紙媒体で直接お見せします。

^{*6}興味を持つというのは、数学に比肩する程度という意味だから、相当厳しい条件であったとは言っておこう。

^{*7}私と同じく社会の情勢に疎い読者のために補足しておく、

強しておいて損はないよ」。もっと言うと「数学の勉強より大事かもしれないよ」と控え目に言っておきたい。

2 作品の概略

2.1 背景

作品の元となったフォースターのインド行は1912年と1921年の2回である。これについては書簡集が『デーヴィーの丘』という題で出版されている。さらに短期間ではあるが、1945年に三度目の旅行をしており、そのとき彼が感じたインドの変化は著作集の『民主主義に万歳二唱』にエッセイとして残されている。こちらもまた当時を窺い知ることができる貴重な資料である。

19世紀後半から20世紀はじめにかけてというのは、英国軍によって鎮圧された1957年のインド大反乱からガンディー登場によってナショナリズムが顕在化するまでの潜伏期間であり、その期間をさらに細かくみれば、反乱を受けてイギリスが支配制度を大幅に変更した前半期に対して、フォースターの訪れた後半期は比較的小さな事件は起こっているものの、どちらかというとき定常期である。しかし裏返せば、地震が起こる前、最も流れが読みにくく不安が増幅する時期とも言えるだろう。アジズに関してはインドの現状に対する危機感をもっているようである。そしてその思いを詩にぶつけようとするのだが……

2.2 あらすじ

大量に出てくる登場人物は^{*8}便宜を図って付録Aにまとめておいた。3つの付録（「登場人物の紹介」、「章ごとの要約」、そして「引用箇所リスト（原文転載）」）が含まれた完全版の原稿を<http://mathscphys.s202.xrea.com/forster/> 以下に置いておくので、興味がある読者はダウンロードしてみると便利かもしれない。以下、登場人物についてはある程度の知識を前提に書くことにする。

ごく簡単に要約する。パブリックスクールを卒業して、インドで判事をしている息子（ロニー）を訪ねて、母親のムア夫人と、彼の婚約者であるアデラが、チャンドラポアというイギリスの直轄領へやってくる。他の植民地と同様、クラブを中心とした人脈で動

2006年10月に発覚した、全国の高校での必修科目（世界史）の履修漏れ事件を頭においてこの部分を書いている。

^{*8}と云うほどの人数でもないが、全体像を把握するまでに時間がかかる。（単純に、名前を覚えるまでが大変ということでもある。）

いているイギリス人と、インド人のなかではエリート層を占める^{*9}イスラム教徒、そしてヒンドゥー教徒の混成からなる街である。

ムア夫人に気を許した医師のアジズが歓待するという形で、リベラルな思想をもつフィールディングと、ヒンドゥーのバラモンであるゴドボレ教授を加えた5人がマラバー洞窟に行くことになる。しかし汽車に乗り遅れたフィールディングとゴドボレを残して、アデラとムア夫人だけが洞窟を案内してもらうことになる。

事件は洞窟で起こる。アジズとはぐれたアデラが一人で洞窟に入ったのだが、その異様な雰囲気には彼女は混乱し、アジズが乱暴を働こうとしたのだと思い込んでしまう。そして逮捕されたアジズの裁判がはじまる。

最後の第三部はアジズが移り住んだマウという藩王国での話である。チャンドラポアとは対照的に、ここではインド人对イギリス人というより、多数派のヒンドゥー教徒と少数派のムスリムとの対立が大きい。アジズはフィールディングと再会し、対話する。

という、裁判の結果を書いてしまってもいいくらい単純なストーリーなのだが、のめり込むと何度でも読みたくなる小説である。その理由は後述するように、それぞれの話題や登場人物、あるいは土地が注意深く選択されていて、全ての要素がうまく絡み合った「インド・ガイドブック」になっているからだ。

3 作品の底流

3.1 「わたしは本物のインドを見たいのです」^{*10}

本節の題にしたアデラの言葉で代表されるふたつのポイント、すなわち「本物の（real）」インド、そして「見る（see）」という行為を作者は懷疑する。

探すべきものは「（エキゾチックな）色彩や動きの陰に隠れている力」（p58）だということはアデラ自身も気付いているし、ムア夫人はアジズと初めて出会ったモスクで早くもその精神を垣間見ている。しかしながらそう簡単に真のインドは姿を見せない。

ところが、インドでは何事もはつきり突きとめられはしないのだ。突きとめようとしただけで問題は消えてしまうか、何かに紛れてしまうのだった（p112）

^{*9}歴史的にはイスラム教徒によるムガル帝国の時代があったことを頭の片隅に置いておこう。

^{*10}[2], p27より。以下断りなく引用したページ番号は基本的に[2]を指すものとする。

真のインド人はもちろん、インドの全てを包含する論理や思想などというものは無く、あえて言えばインドは風景に宿っているということになる。それは例えば冒頭で高らかに歌い上げられる空であり、マラー丘陵、あるいは吊りうちわの紐をひっぱっている男^{*11}である。ただしそれを見ることができる人は限られており、しかもほんの僅かなタイミングにだけ見ることができる貴重な瞬間なのだ。ムア夫人さえ「垣間」見ただけである。

読者は注意して風景描写をたどっていくとその瞬間に立ち会うことができる。風景と(心的)事件は必ず同期して描かれており、ムア夫人の場合にはクラブから出たときの、

老婦人はとつぜん、あらゆる天体と一体になったような、自分もその仲間になったような気持ちに襲われた。まるで、新しい水が流れこんできれいになった貯水池のような気持ちだった(p34)

という場面であり、フィールディングの場合も同様である。ただ、アデラの場合は「吊りうちわの男」を見たが、本人はそれがそうだと認識していない。

遠くからの声はよどみなく流れ出て真理の道をたどり、彼女は背後の手動式扇風機から吹いてくる風にふわりと乗っていた……(p312)

無意識のうちに「遠くからの声」の指南を享受し、正しい道を選んだのだ。本人が自覚できなかったとはいえ、これは誰にでも出来ることではない。実際、法廷にいた他の英国人の目には「吊りうちわの男」はいつもの下僕として映っている。アデラには「風に乗る」だけの素養・ポテンシャルがあったと読むのが正しいだろう。

アジズの場合はどうかと言うと、

アジズはここで馬を止めると、遙か彼方で曲がっている辺りまで一望の下に見えるマウの大貯水池をじっと眺めた。そこに夕空の雲が映っているせいで下界までが壮麗に輝き、大地と空とが身をすり寄せて歓喜のうちに衝突しかけているように見えた(p423)

^{*11}[2] は punkah を「手動の扇風機」と訳しているが、これは矛盾した表現だと思う。あるいは「男」が機械の一部と見なされているのでは?という解釈に基づいて、小野寺さんの解説を読んだみたが、どうもじっくりこない箇所が散見されるので、引用箇所以外では「吊りうちわ」という定訳(宮本・土井訳の『ビルマの日々』(オーウェル著)では「揺りうちわ」となっている)を採用する。また、注意しておくとして、ここでは「男」は人間としてではなく、法廷内の風景あるいは神として描かれている。

にもかかわらず、タイミング悪く邪魔が入る。そのままの続きで、

彼はまた冷笑的な気分になって、唾を吐いた。さらに冷笑的になっていた。磨き上げたような丸い水面のまんなかを、小さな黒い汚点が進んできたからである—迎賓館のボートだった。あのイギリス人どもは何かオールの代わりを見つけて、やはりインド視察という仕事をつづけているのだ。(pp423-4)

この場面は「インドを何とかしたい」という彼らの願いを無下にする英国人を象徴する場面であり、「黒い汚点」に乗っているのは、まさにマウを「見」に来た一行である。アジズの冷笑的な態度もまた邪魔をしているというのは事実であるが、

「インドを見る」という、チャンドラポアで彼をまんまとミス・クウェステッドにおびきよせたこのポーズは、インド支配の一形式にすぎなかったのだ。その背後には同情の念など微塵もなかったのだ(p424)

という箇所でも明らかになるように、「見る」という態度そのものにも問題がある。ツーリズムは大変結構だが、次節で述べるような愛とか寛容の精神といったものは、頭上から見下ろしているようでは達成できないものなのだ。亀裂は深まるばかりである。

3.2 Affection の勝利

まず辞書的には同じ意味をもつふたつの単語: affection と love の関係を、この作品に限っては考え直したほうが良さそうだ。というのも、どうやら作者は affection という単語を使うことによって愛という言葉の雰囲気を変えているように見えるからだ。ちなみに小野寺訳ではそれぞれに「愛情」と「愛」という訳語をあてて区別している。loveの方は通常の意味。そして affection という若干文語的な表現にはもっと重要な意味が与えられていると考えてみよう。

おそらく affection が初めに登場するのは次の箇所であろう^{*12}。

それでも二人は友達であり、兄弟だった。すでにあの写真で盟約が固まったいま、その点はもう動かしようがなくなり、めずらしく愛情が勝利をおさめて、二人はたがいに信頼するようになったのだ(p161-2)

^{*12}電子版が入手できないのでチェックする気も起こらないが、重要な使われ方をする箇所としてはこの部分だろうと思う。

これはフィールディングとアジズが初めて立ち入った話をする場面において使われているのだが、よく考えてみると同じような場面は前にも出てきた。

美人にもかきたてることのできない炎が燃え上がると、言葉こそ愚痴っぽくても彼の心の奥は熱くなり、それはやがて激しい言葉となって爆発した。

「奥さんはわたしを分かってくさる、わたしの気持ちがお分かりになる。他の人たちも奥さんみたいなら」(pp25-6)

アジズは、モスクで出会ったムア夫人に同情心^{*13}を感じて、一気に心の中を打ち明ける。それ以後、彼は完全にムア夫人だけは別格扱いすることになる。完全に個人的なレベルで、しかも理性を介さずに心の底から相手に全幅の信頼をおくような愛情がお互いの間に成立した状態のことを affection と考えよう。対象は「直接知っている相手」だけで、間違っても”Everything is Love”などと気軽に口にできる言葉ではない。

love に関してはムア夫人が饒舌である。

結婚が役に立つのなら、人類は何世紀も前に一人の人間になってますよ。それなのに愛だなんてくだらないことを言って、教会の愛だろうと洞窟の愛だろうと、みんな同じなのよ (p277)

アデラは同情を買ったことはあったが、結局 affection を獲得できなかった。その点に関しては裁判の後でも変わらない。

彼女の言い方には少しも恨みがましいところはなかったが、ハミドゥラの考えたとおり自尊心がなさすぎたかもしれない。ひたすら迷惑をかけまいということしか考えていなかったのだから (p336)

与えるより与えられるほうが幸せなのだ、ということがムア夫人とフィールディングの側にいるときだけは理解できた (p191) アジズと比較すると、この「自尊心」が理解できる。自尊心とは言わば「わがまま」とか「矛盾」を含んだものであり、一方通行の love には見られないものなのだ。affection を受けとめる側は自尊心をもって相手に接するため、必然的に、ある程度自分をさらけ出すことになる。それができないアデラ、心からの言葉を感情のままに口にできないアデラがインド人からの信用を得ることはなかった。

^{*13}と云ってしまうと安っぽいですが、ムア夫人は自分が思ったことを素直にアジズに伝えた、人間としてアジズと対話したのである。

さらに進めて、affection にもとづいていない愛(あるいは人間関係)は簡単に衝突を起こすものだと言ってもよさそうだ。

彼(フィールディング)はインド人相手イギリス人の男相手なら仲良くやれても、イギリス女とも仲良くするにはインド人との交際はあきらめなくてはならないことを知った。このふたつは、どうしても結びつかなかったのである。どっちを責めてもはじまらず、たがいに相手ばかり責めているといって非難してもはじまらなかった。これは単純な事実で、どちらかを選ぶしかなかったのである (pp79-80)

これを裏返して考えれば「affection は属性とは無関係に両立する」というのがストーリーから伝わってくる重要なメッセージだと解釈しては、やりすぎだろうか?インドでの経験に基づいて上のように考えていたフィールディングではあるが、アジズとは affection にもとづいた親交を結び^{*14}、さらには裁判の後で孤立してしまったアデラを心から支える。

25 章から 29 章までに見られる、アデラに対するフィールディングの親切(kindness)が物語全体に対してどう作用しているかを理解するのは難しいが、上のように考えるとすんなり呑みこめる。単に弱者に対する同情ではなく、もっと強いモチベーション:「アデラは正しいことをした」というフィールディングの思いが根底にあるような気がする。結局、アジズの心のなかに潜むムア夫人も同じように考えていたように、

アジズはとつぜん屈した。夫人の息子と結婚することになっていた女を自分が許してやることは夫人の望みなのだ、夫人に敬意を表す道はこれしかないという気持ちになって、激情に駆られた美しい言葉で弁償金はいっさいいらぬ、裁判の経費だけもらうと宣言したのである (p360)

泥沼の争いは affection によって退けられたのである。では affection を獲得するためには何をすればよいのか?あるいはどういう人材が適しているのか?

人に親切にしようという気持ちがあれば、神様はおよろこびになって……たとえ無力でも本心からそう思っていれば、祝福してくださいのよ。誰だって失敗はするわ、でも失敗にもいろいろあるのです。善意の上

^{*14}当たり前すぎて見逃しがちだが、フィールディングは一貫してアジズの無実を信じている。

にも善意．どこまでも善意を持ちつづけるの (p64)

むろん盲目的に善意をばらまけばよいなどとはフォースターは言わないだろう。「寛容の精神」のころとしてはこれでよいが、affection となるとちょっと違ってくる。「来たれ」と何度叫んでも、インドにおいては神の資源が限られており、すぐに神の供給不足になってしまうのだ (p115)．だから何ができるかというところ、

フィールディングは自他ともに許す徹底的な無神論者だったのに、この友達の言うことなら何でもおとなしく聞いた．そうでなければ友情は成り立たない (p350^{*15})

たとえ相手が矛盾していても、それを超えたところで「愛と誠実に基礎をおいた直接的な人間関係」があればいいのだということになる．これもまた寛容の精神^{*16}である．

3.3 法廷という舞台設定が象徴するもの

この小説の特筆すべき点として、当時あるいはその後のインドの政情との一致がとれているということを手挙げておきたい．いつもはおとなしく話が進むフォースターの小説なのに、『インドへの道』では裁判を中心に据えたストーリー展開によって勢いが生まれている、というのは言うまでもないことだが、さらに言うと、法廷を舞台としたことによって、この小説のもつ歴史的意義が深まっているのである．

タイプの違う二人の弁護士ハミドゥラとマームード・アリをはじめ、ロニーに代表される司法界に重点を置いたことと、その後のガンジーの登場とは全く無関係ではなかろうし、当時のイギリスによる支配で最も重要なポイントは司法制度の確立であったともいう．事実、初代ベンガル総督のヘースティングズが最初に手をつけたのもここである．[5] によれば

だが、問題は、とくに民事の領域において、どのような法を運用するかということであった．婚姻、相続などの、いわゆる家族法の分野においては、インド人のあいだでも、宗教や地域あるいはカーストの違いによって、さまざまに異なる慣習法が見られた．したがって、インド人全体に画一的に適用することのできる民法典を制定することはきわめて困難であった (p274)

^{*15} この「友達」はアジズのことでないから、もっと適切な引用箇所があるかもしれないが、言っていることは同じである．

^{*16} 論説『寛容の精神』では消極的な意味を使われていたので、ここでは「広義」という接頭語をつけてもよいだろう．

この事情も作者はきわめて正確に捉えていると言ってよからう．インドに長期で、しかも二度も行ったのだから、正しい認識ができて当たり前だと思われるかもしれないが、その当たり前を素直にできるフォースターは偉いのである．そして背景にあるのは、universality をもった彼の「姿勢」なのだ．

「ぼくは、どうしようもない国を力で押さえこむためにインドへやって来たのです．宣教師、労働党員、あやしげな甘ったるい文学者なんかではない」とロニーに喋らせた後で、

これは彼の本心だった．彼は毎日法廷で、ふたつの嘘の供述のうちではどっちがましかを見きわめ、堂々と正義を実行しよう、比較的強い者にたいして弱者を、もっともらしいことを言う人間にたいして支離滅裂な人間を守ろうと、虚言と追従のなかで必死になって働いていたのである (p63)

と作者は言うが、まさに「パブリックスクール的な態度が、本国では考えられないほど臆面なく発揮された (p49)」典型的な例になっている．そのロニーが牛耳る法廷の裏で起こることは喜劇である．「日常の個人としての自分は棄てて、民族的集団に埋没 (p224)」したイギリス人が「めったに使われることのない、心の芯にある柔らかな部分 (p247)」を束の間引きだし、挙げ句の果てには「女、子供 (p251)」という言葉で男たちは正気を失ってしまう．そして「ヒースロップは殉教者だったのである (p253)」まで来ると、最近のどこかの国の情景が頭に浮かんでしまう．その状況下では

ミス・クウェステッド自身より彼女が起こした問題のほうがはるかに重大だったものだから、人びとはどうしても彼女のことなど忘れてしまったのである (p298)

どんなときも変わらず信用できるのは affection だけなのである．

3.4 外からの力

以前引用したことがある^{*17} 『眺めのいい部屋』、あるいは『ハワーズ・エンド』をとってみても、フォースターの作品には何度もこのテーマが登場する．

この力で「アデラの結婚」を説明しよう．アデラの愛について懸念するムア夫人の見解は既に提示してあるので、アデラ本人の意識を簡単に追ってみると、まずロニーがインドに接する態度が気に入らない、そしてアデラに対しても公的な態度を崩さない

^{*17} <http://mathscphys.s202.xrea.com/doc/biology/Random.pdf>

彼に、アデラは失望する。「経験が二人を隔てていた (p111)」のである。ちょうど二人の意識が変化したときに同期するのは車の事故である。ナワブ・パハドゥールの車でドライブをしていると、夜の闇とともに大きな動物にぶつかる。車から降りて観察してみると、

二人は乱れているタイヤの跡をたどって、びっくりしたところまでもどってみた。ちょうど橋を渡りきった場所だった。動物はおそらく川床から出てきたのだろう。車輪の跡はまっすぐで、菱形の模様がついた二本のリボンのような筋がのびているのをたどっていくと、それが急に乱れていた (p117)

この二本の平行線が二人の関係を暗示しているようにもとれる。また、その原因となったのは論理的に考えると動物だが、

ムア夫人は身震いして「幽霊だわ!」と思ったが、口には出さなかった。若い二人は自分たちの物の見方にとじこもっていてそんなことは考えもしなかつたので、幽霊は支持する者がいないまま消えてしまった。あるいは心のなかでもめったに口をきかない部分に、ふたたび吸収されてしまったのだろうか (p127)

この「口をきかない部分」に「ふたたび吸収され」というのが重要で、全く同じことがマラバー洞窟の「こだま」でも起こる。もっとも重要な歴史的分岐を超人間的な力が支配しているというのは何度も出てきて、アデラに洞窟で起こった事実を伝えたのも「吊りうちわの男」だったし、フィールディングとステラ (ムア夫人の娘) の結合はインドに祝福された (p440)。ヒンドゥー教徒とは距離をおいていたアジズがイギリス人と一緒に御渡りの見物に出たときに、ボートとボートが衝突したのも運命である。空と大地の関係もそう、

この空がすべてを決める。気候や季節ばかりか、大地を美しくする時まで。大地だけではほとんど何もできず、せいぜいたよりなげな花を咲かせるくらいのものだ。しかし、空がその気になればチャンドラポアのバザールにも栄光が降りそそいで、地平線から地平線まで一気に祝福されるのである。(p5)

その空の彼方には「空よりももっと公平な何か」があつて (p49)、洞窟に至っては「いちばん遠いこだまの彼方には、沈黙の世界がひろがっているような気がしたのだった (p65)」

「人間の営みを最適化してもせいぜい民主主義程度であり、それ以上となると人間の能力を超えた問題である」というフォースターの考え方はどの作品でも一貫している。重要な局面になると必ず登場するこの力は、フォースターを理解する鍵のひとつなのだ。

3.5 ヒンドゥーの宇宙観

既に一度出てきた内容だが、ゴドボレ教授が神に捧げる歌をムア夫人に解説している。

「来たれ、来たれ、来たれ、来たれ、来たれ、来たれ、何度言っても、神は来てくれません」(p104)

インドの自然に根ざしたこの性質には思想的意味も含まれているようで、

御渡りは容易ではなく、いまこの場ではできない。成就できないときでなくては、理解できないのだ。神を棄てるのはその象徴なのだった (p435)

日本語にしてしまうと分からなくなりますが、この「御渡り」という行事が原文では passage で、原題である *A Passage to India* を示唆しています^{*18}。

「いやいや、もう一度ご説明しましょう。善と悪は、言葉が別なことでも分かるのとおり別なのです。しかしわたしは、どちらもそれぞれ主なる神の側面なのだと思います。神は善のなかに存在して悪には存在しないのですが、存在 (presence) と不在 (absence) の違いとなると大きすぎて、わたしの弱い頭脳では理解できません。しかし、不在という概念には存在という概念がふくまれていて、非 (nonexistence) とはちがいますから、われわれは何度でも『来たれ、来たれ、来たれ』とくりかえせばいいのです」(p244)

そういう宇宙観はムスリムのアジズにとっても理解が困難で、インドにおいては「アッラーのほかには神なし」というイスラム教徒の言葉では、複雑なモノと精神の奥義まで探ることはできず (p381)、そんな教義は (ヒンドゥー教徒の多い) マウの寛容な雰囲気のみでは溶けてしまう (p410)。ましてロニーで代表されるイギリス人は

^{*18}一応注意しておく、作者本人はホイットマンの詩: *Passage to India* が題名の元だと言っています。御渡りの行事と題名に関連を求めてもいいかどうかは読者が判断してください。

マラバー洞窟がどれもこれもそっくりなのは有名で、将来は白ペンキで一連番号をつける予定にさえなっているのだ」(p274)

という馬鹿げた考えをもちかねない^{*19}。そのころは、既に言ったように、インドのひとつの側面である洞窟や空の「沈黙」を美德とする考え方で、こだまというのはその沈黙を破る者に対する大地の反撃ではないだろうか？

3.6 理想を求めつづける心

パブリックスクールを手玉にとって擲擲する場面はこの作に限らず頻りに登場する。擲擲するだけで「こうあるべきだ」ということを言わないので、一見すると教育に対する無関心かと思うかもしれないが、これがフォスターのいいところで、声高に改革を叫んだりして読者の興ざめを誘うようなことはしない。自分の小説は「暴力が幅を利かせる」ような時代ではなく、芸術としてきちんと理解されるような時代に読まれて、人々の意識の底に眠ってくれたらそれでいいのだ、とでも言うかのような控え目な態度、そして数語のユーモア、あるいは洗練された皮肉で痛烈な一撃を返すような文章は、読んでいて快感なのである。

今回はあまり触れるつもりはないが、彼の心は「わが恋人、慕わしき共和国」(あるいは小野寺さんによれば「愛の共和国」)を指向している。これはエッセイ集『民主主義に万歳二唱』に収められた有名な評論『私の信条』の主題でもあるが、『インドへの道』からも十分に読み取ることができる。簡単に言うと、「愛の共和国」はまさに3.2節で取り上げた *affection* で全てを包み込む世界であり、現実には到底実現不可能な社会である。ただ、それを指向し続けることによって「比較的ましな」選択肢である民主主義^{*20}を最高の状態に保てるという考え方だ。ロニーが自認する大英帝国による支配だって、ほんの少し意識するだけで違ってきたはずだ、とフォスターは語りかける。

少しでも悪かったという気持ち—狡猾な逃げ口上ではなく心からの悔悟の念があったなら、彼もちがう人間になり、大英帝国も今とはちがう国になっていただろう (p63)

ただ、その意識というのは積極的なものだとは勘違いして、相互理解の不可能性を認めないとフィールディングのように失敗する。

^{*19}もちろんこの箇所はフォスターの皮肉だと思うが。

^{*20}多様性と批判を許すから万歳は二唱するが、三唱目は「愛を原理とする理想の共和国」のためにとっておく。というのが「民主主義に万歳二唱」という言葉の内容である。

彼は、この世はたがいに理解したがっている人間のあつまった世界で、その目的を達成するには善意プラス教養と知性がいちばんだと信じていて、これはチャンドラポアには都合のわるい信条だったのに、ここへ来たときの彼はもう年をとりすぎていてその信条を棄てることはできなかったのである (pp78-79)

作者は「結局一番大事なのは寛容の精神だ」と言いたいらしく、物語の最後もそれ以上は無理なのだというを示唆して終わる。これが本当に真実かどうかは私にはまだはっきりとは言えないし、経験と照らし合わせて考えてみる必要があると思う。

アジズが朗誦するガーリブの詩が印象的である。

クリシュナ神への呼びかけほどはっきりしたものではなくても、やはりわれわれの寂しさを、孤独さを、いくら呼んでも来はしないものの、ぜったい存在しないという証拠もない「友」を、もとめる声なのだった。(p139)

そして自分の詩のテーマ選びに思い悩むアジズはふと思いつく。

未来を歌う歌は宗派を超えなくてはいい。(中略)アジズには、母国という曖昧だが堅固なものが見えてきたのである。生まれた国への愛情は持っていなかったのに、マラバー丘陵がそれをもたらしたのだった。彼は目を半分つぶって、インドを愛そうとしてみた (p370)

この「目を半分つぶって」相容れない部分を許容し、とにかく相手を「愛そうと」する姿勢こそ、全ての人間にフォスターが求めていることなのだろう。この精神がインドの独立運動を生んだことは言うまでもない。

3.7 Jew の論理

最後に挙げたこのテーマについてあからさまに言及しているのは一箇所しかない。ロニーがフィールディングに宛てた手紙でインドでの反英運動について、

「……つぎからつぎに、すべて煽動による事件が続発しているのですが、われわれにはその糸がたどれません。ここにいるのが長くなるほど、すべてはつながっているという確信は深まるばかりです。わたしは、背後にはユダヤ人がいると考えています」(p426)

という意見を述べている。これは文脈では判事であるロニーに代表される西洋の理性が、明らかな誤謬をおこしているという皮肉と理解されるが、この作を通し、フォスターは一貫して「先入観」や「決めつけ」を批判している。イスラムとヒンドゥーの関係。そしてどちらも同じインドだと思っている英国中産階級の三者間では、これのせいで、「心からの言葉」など遥か彼方に霞んでしまう。アクバル皇帝がコーランに代わる新しい宗教をつくったところで解決するものではない。

Jew の論理という大げさに聞こえるかもしれないが、ヨーロッパに蔓延する Jew の問題だけではなく、あらゆる問題（特に人種問題）に適用できる形で書かれている。困難はさらに深いところにもある。タートン長官に招待されたブリッジパーティを受けるかどうかをインド人エリートたちが相談している建物の外に目をやれば

彼がこの話をしたのは裁判所のそばの、弁護士たちが依頼人たちと会う狭い部屋だったが、依頼人たちは外の埃の上に腰をおろして弁護士を待っていた。彼らには、タートン氏の招待状は届いていなかった。そして、さらにその外側には、腰布以外何も身につけていない人びと、それどころか腰布さえつけていず真っ赤に塗った人形の前で二本の棒を打ち合わせながら毎日を送っている人びと—教養のある人間には見えない世界を漂っていて、やがてはこの世からの招待状など届きようのない世界へ行ってしまう、さまざまの階層の人間たちがいたのだった（pp45-6）

こういう、英国人とは別の世界に生きている人たちがいるにもかかわらず、小説でとり上げることすらできない。フィールディングを含む英国人が交流できる相手はあくまでインド人エリートであって、理解に苦しむカーストは4つに分類してしまえばよいし、宗教問題は宣教師に任せておけばよいと考えられてしまうのだ。

まずは相手を理解しようとする。そこから寛容なり善意なりが生まれるということになるだろうか。

4 鑑賞の方法論

4.1 比較対象となる作品について

『インドへの道』を評する際、オーウェルの『ビルマの日々』がよく引き合いに出されるようだが、構成にしてもインド人との関係を見つめる際の洞察の深さにしてもフォスターが抜きん出ているように思う。

問題はなぜ差が生まれたか？ということだが、よく言われるように、二人が執筆した時の年齢も大きな理由だろう。ただ、作中の現地の空気として大きく違うのは、フォスターからは「現実のごたごたに惑わされずに人間関係を大事にしよう」という意図を感じられ、またそれが可能な立場・時代・土地において書かれているが、オーウェルの場合、どうしても「現実のごたごた」、もっと言うと「争いごと」がフローリーとベラスワミの人間関係の邪魔をしていて、結果的にウ・ポ・チンの陰謀がとぐるを巻く暗い作品になってしまっている。まさに「暴力によって芸術が無力化されている」と言ってもいいだろう。

4.2 映画化について一言

『インドへの道』は「イギリス植民地を舞台にした壮大な史劇」などではない。あくまで人間同士の交流を描いた作品で、扱っている問題には普遍性がある。今回、一度は観ておこうと思って、リーン監督（David Lean）による同作品のビデオを借りてきたのだが、この映画は小説の微妙な人間関係やその背後の問題を十分に捉えきれていないという印象を受けた。象徴されるのが英国軍が行進するシーンで、映像技術とエキストラを使ったスケールの大きい映像はリーン監督の真骨頂といったところだが、これは作品に流れるインドの感覚とは正反対である。外面ではなくあくまで各個人の内面的なものに迫ろうとした原作の映画化は、監督の選択から間違っていたと言わざるを得ない。フォスターの映画とは思わず、リーン監督のための映画だと思った方がよいだろう。

インドを味わう代替案としてはタブッキ（Antonio Tabucchi）原作の『インド夜想曲』（*Notturmo indiano*）を紹介したい。短い小説だったからこそというのもあるが、インドを巧みに切り取った映画になっていると思う。フォスター時代のインドとは大きく違う現代の風景だが、エキストラがエキストラしているリーン監督の作品とは違って、実際の貧困層が被写体になっているし、各俳優の演技もすばらしい。

では映画版『インドへの道』の監督は誰がやるべきだったか？というと、アイヴォリー（James Ivory）である。彼の手によるフォスター作品には『ハワーズ・エンド』、『モーリス』そして『眺めのいい部屋』があるが、いずれも美しい映像でイギリス中産階級が揺動する様子が描かれている。何より監督自身がフォスターの小説を愛しているというのが観ている人に分かるということが重要で、長大な原作のエピソードを逐一脚本化するのが不可能なフォスター作品ではあるが、その骨格は逃していないと思う。

*21 手軽にフォスターを知りたいと思ったら彼の作品を観てほしいと思う。

5 おわりに

「結局フォスター作品のいいところはどこか？」

一言で答えるなら人間世界を見抜く力とその universality である。そしてあらゆる局面で有効な「姿勢」*22 を提供してくれる。姿勢が絶対にぶれないというのがその大きな証拠で、しかも間違いなく理性に基づいた安定だから安心して読めるし、その適用範囲は広大である。なぜ今日まで日本ではそれほど注目されてこなかったのか不思議で仕方がないが、その理由を考えてみると思い当たる節がある。フォスターの時代（正確にはフォスターがまだ小説を書いていた時代）というのは大英帝国末期で、まだヴィクトリア朝の残光で覆われていた時代であった（「漱石の時代」ともほぼ一致している。）それ以後の日本にあったのは戦争とその後の急速な経済発展の時代であり、「優雅な怠惰」などという芸術は許されなかったのかもしれない。

さらに推測を重ねよう。[3]の帯には「精神の＜糊づけ＞をきらった真の自由人の核心を明らかにする50年の読みの成果」とある。帯台詞なので受け止め方はほどほどにして、ここで着目するのは「50年」である。英文学の専門家である小野寺さんが、圧倒的な背景知識をもとに到達したゴールがフォスターである一方、ろくに素養もない私はいきなりフォスターに惚れ込み、その「姿勢」に心からの同意をすることができる。これはもしかすると、冷戦はもちろん、高度経済成長も大学紛争も知らない世代だからこそなのかもしれない。フォスターは難解さに目移りしてしまうような文章は書かないし、奇異をてらうことはない。古すぎず、新しすぎず、普遍的な人間関係にピンポイントで焦点をあててくれるので、「姿勢」を読み取ること自体はそれほど難しくないとと思う。ここまで読んでくださった読者の方は是非トライしてみしてほしい。

私事ながら、今夏10年ぶりにマレーシアを訪れる

*21 [3] は

映画『ハワーズ・エンド』のばあい、その脚色の仕方は、思想という面では原作にかなり忠実な力作なのに、全体の雰囲気には違和感があるのは、原作のこういうユーモア感覚がじゅうぶんこまれていないからで、それはアイヴォリー監督がアメリカ人であることと無関係ではないのかもしれない（p16）

と手厳しいが。

*22 これが有効でなくなったときは、すなわちフォスター時代の終焉を意味し、それは恐らく「人間関係」の本質が決定的に変わってしまったときのだろう。

機会を得たことと相まって、貴重な体験ができた。マレーシアというのは縮小版インドといった面もあって、多様な民族的・宗教的バックグラウンドをもつ人々の国である。また、かつて英国領だったという点も類似している。その地で欧州の青年と仲良くなり、彼をまじえてムスリムの女性とジハードについて議論をした時間は濃密なものであった*23。

また、10年前には気付かなかったこともたくさん見つけた。その中でも身にしみたのは歴史の重要性である。通常、異国に行くときはその土地の言語を習得しておくべき、とされるが、時として相手の歴史を知ることが最も重要になる場合がある。日本人の感覚では歴史とは史跡や調度品といったモノに宿っていると思いがちであるが*24、マレーシアでは（およびそれに準ずる国々でも恐らく）違う。道行く人ひとりひとりの顔や声、態度すべてに歴史が宿っているという感覚をもつ。仲良くなったムスリムの女性*25はタイ系マレー人、インドネシア系マレー人を見分けることができ、私は「流石だ」と思ったし*26、飲食店ひとつにしても歴史によって場の雰囲気は全く変わってしまう。

土地の歴史を知る方法として適切なのはとにかく現地の人々と話すことだと思うが、フォスターの『インドへの道』はそれに準ずる有効性をもつ、最良のインド*27ガイドブックになると思う。「ガイドブックのガイド」ではあったが、この文章が読者のフォスターへの関心を引き起こすきっかけとなれば幸いである。

残念ながら芸術と政治の問題、インドの女性観といった話題にふれることができなかった。また慣れないことをしている以上、読みに完全な誤りが見つかる可能性もあると覚悟している。大量の引用箇所から選択したため、引用のミスも考えられる。発見された方は気軽に声をかけてくださるとありがたい。

*23 とは言うものの、2週間強の滞在期間のうち2週間は熱帯雨林とマングローブ林の中で過ごしていたのでクアラ Lumpur（首都）で人と触れ合うことができたのはたった3日間だけであった。

*24 これは次のような比較をすれば如実である。日本で最も有名なガイドブックである『地球の歩き方』で「マレーシアの歴史」には2ページ弱が割かれており、本の中での配置は最後であるのに対して、世界的に最も有名なガイドブック「Lonely Planet」では丸々10ページが、しかも本の冒頭に堂々と掲げられている。マレーシアの歴史と言えば「ムルデカ・スクエアに行くことだ」という日本人との感覚の違いは、単純に出版社の差もあると思うが、私は感じる。

*25 先に登場した人とは別人。

*26 これは私たち日本人が朝鮮系日本人と中国系日本人を識別している状況をイメージすればよからう。

*27 あるいは範囲を広げて旧英国領と言ってもよからう。

A 登場人物

フォースターの作品は、各登場人物が重要な役割を果たし、その行動が後の話に影響します。この小説は特に人物把握の正確さが求められるので、登場人物のリストを作っておきました。おおよそ登場する順番と一致しているはずですが、

Aziz をとりまくインド人

Aziz ムスリム。Minto 病院の医師 (Major Callendar の部下)。妻とは死別。35 章で 3 人の子が登場 (Jamila, Ahmed, Karim)。[p33]

Hamidullah and Hamidullah Begum (夫人) 弁護士 (仕事上 Ronny との関わりが強い)。Aziz の親戚。Cambridge への留学経験がある。後述の Mahmoud Ali と比べると鳩派。[p33, p36]

Mahmoud Ali Hamidullah の弁護士仲間。反英感情は非常に強く、強硬的。[p33]

Mohammed Latif Hamidullah の親戚だが Hamidullah 邸に居候している。上記 3 人と比してインドの庶民という印象を受ける。[p37]

Nawab Bahadur Chandrapore の大地主で、英国側にも一目置かれる実力者。孫の名が Nureddin。[p56]

Ram Chand Hamidullah たちの弁護士仲間か？ [p56]

ヒンドゥー教徒たち

Narayan Godbole Fielding の下で働く教師。ヒンドゥー教の高僧。[p84]

Panna Lal Aziz の助手。

Mr. and Mrs. Bhattacharya Mrs. Moore と接触した。[p62]

Mr. Das Aziz の裁判を担当した判事。Mrs. Bhattacharya の親戚にあたる。[p62]

英国人

Cyril Fielding 校長。Stella Moore と結婚する。

Mrs. Moore Ronny の母。Ralph と Stella は Ronny とは父親違いの子。[p42]

Adela Quested Ronny の婚約者。Fielding の学校の講義に出ている。[p46]

Ronny Heaslop 治安判事。[p43]

Mr. and Mrs. Turton Chandrapore の地方長官。副総督の配下にある。

Nancy Derek Mudkul という僻地の藩王妃の女官をしていた。[p60]

Mr. and Mrs. McBryde 警察部長。Miss Derek のホスト。[p60]

Mr. and Mrs. Callendar Minto 病院の院長で Aziz の上司。[p40]

Mr. and Mrs. Lesley 役人と思われる。§8 で車が事故を起こした道を造った人物。[p39]

Graysford and Sorley この地方の宣教師。[p58]

誤植、意見、苦情等は、次のアドレスまで：
ichino@mathscphys2004.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

References

- [1] E.M. Forster, *A Passage to India*, Penguin Classics, 1924.
- [2] E.M. Forster (著), 小野寺 健 (訳), 『インドへの道』 (みすず書房, 1995).
- [3] 小野寺 健, 『E. M. フォースターの姿勢』 (みすず書房, 2001).
- [4] 小川 幸司, 『E・M・フォースターを読む』 (思想史研究会論叢, 第二号, 1998).
- [5] 辛島 昇 (編), 『新版 世界各国史 (南アジア史)』 (山川出版社, 2004).
- [6] P. J. Marshall, *The Cambridge Illustrated History of The British Empire*, Cambridge University Press, 1996.